

人文会ニュース

1999. 9

- 電子出版物は生き残れるか（上）
.....秋田公士 1
- 一五分で読む「歴史」.....歴史書販売研究会 3
- 米国書店の現状.....菱川摩貴 17
- 99年度委員会活動について..... 23



有斐閣 研刊局内
(価格に税別)
東京・神田・神保町2丁目03-3817-0711
http://www.yuhikaku.co.jp/
(ご注文は03-3817-0711)

現代政治学小辞典

阿部 齊・内田 満・高柳先男編
四六判上製 入 四一〇〇円

新版

■事項項目二四〇〇件＋人名項目四〇〇件
二〇年ぶりの全面新版！現代政治学の全領域にわたるスタンダードな知識を提供する。21世紀の政治を読み解くための最新・最良の必携書。引きやすい小項目主義、事項・人名には外国語を併記。国際機関や主要各国の政治機構図、日本の総選挙のデータ等を収録。



未来社

表示価格は税別

同時代写真

クロニクル1993-1997

飯沢耕太郎 ポストバブルの時代状況の中で写真をめぐる5年間の動向を写真●2800円

パズヒンの死

四幕物の喜劇

シチェドリソ 19世紀ロシアの専制と闘った諷刺作家による絢爛たる諷刺喜劇●2200円

民間巫者信仰の研究

宗教学の視点から

池上良正 青森・沖縄を中心に巫者信仰における世界観・救済観の本質を究明●13000円

森 洋子著「本文四〇頁・カラー16図八頁」図版約二八〇点
シャボン玉の図像学
●五八〇〇円
シャボン玉の豊富な図像資料や文芸作品を渉猟し、生の価値観をさぐる精神史、文芸史、美術史の学際的研究。

〒112-0002 文京区小石川3-7-2 ☎(03)3814-5521

日本民俗大辞典

日本を知り、日本文化を知る。
新・民俗辞典誕生。
福田アジオ・神田より子
新谷尚紀・中込睦子編
湯川洋司・渡邊欣雄

へ全2冊(上「あしそ」1発売中/下「たしわ索引」)12年3月刊行
完成記念特別価格1各一八〇〇〇円(12年9月30日まで)
12年10月1日以降1各二〇〇〇〇円/四六倍判・平均一〇五〇頁
激動の現代、日本文化の「いま」をどう読み解くのか。民俗学の蓄積を生かし、歴史学等の成果も取り入れ、日本列島の多様な民俗文化の全容を解明。沖縄・アイヌなども視野に入れた。従来の民俗学の枠組を越える最高水準の民俗百科。へ内容見本・送呈

吉川弘文館

価格
税別

東京都文京区本郷7-2-8・電話03-3813-9151

日本食物史 上下

各5800円

長篠・設楽原合戦の真実

2200円

ヨコハマ洋食文化事始め

2500円

風水地理入門

2500円

アメリカ・インディアンの歴史

1900円

※価格は税別

雄山閣

東京都千代田区富士見2/☎03(3262)3231

電子出版物は生き残れるか (上)

秋田公士

以前、酸性紙のことが社会問題となった。どの新聞もこぞって、「酸性紙を使った本は百年も経ったらボロボロになり、読めなくなってしまう」と書いた。しかし見方を変えれば、紙の本は、「酸性紙ですら百年は保つ」ということができるだろう。紙の本は、少なくとも百年の寿命を保証されているのだ。

それに対して、電子出版物の場合はどうだろうか。デジタルデータは劣化しない、それは事実だ。しかしデータが劣化しないということは、必ずしも百年後、いやそれどころか十年後であっても、確実に読めるということを保証してはいない。

国会図書館が電子出版物の納本制度をスタートさせた。時代の趨勢からして、電子出版物を無視することはできなくなったのだろう。それはたいへん結構なことだ。しかし同時に、国会図書館は大きな問題を抱えることになった。電子出版物は、単独では存在し得ない。あるものはパソコンを必要とし、あるものは専用の端末を必要とする。費用の面でも大変だが、それ以上に、何十年何百年にわたって、電子出版物を「読める」状態に、ハードを保たなければならぬのだ。考えただけでも気が遠くなる。

ベータ方式のビデオの例を持ち出すまでもなく、華々しく登場し、気がついたときには存在しなくなっていたハードは数多くある。記憶メディアにしてもそうだ。出版社にとってフロッピーによる原稿の受け渡しは常識になりつつあるが、既にマッキントッシュは、新製品の本体からフロッピードライブを外してしまった。「フロッピーの管理をどうするか」などと言っているうちに、印刷所から、「フロッピーなんて古くさいメディアに、

うちは対応できませんよ」と言われる時代が来ないとも限らない。

ハードだけではない。現在、パソコンのOSといえば〈マックOS〉か〈ウィンドウズ〉だが、ちょっと前にはIBMが〈OS 2 ワープ〉をテレビでさかんに宣伝していたのを記憶している方もあるだろう。あれを、まだ使っている人はいるのだろうか。同様に、いまや我が世の春を謳歌する〈ウィンドウズ〉だが、十年経ったら、「あゝ、そんなOSがあったよね」ということになっていても、何の不思議もない。マックの大逆襲もあり得るし、マイクロソフトやアップルとは関係なく、画期的なOSが登場する可能性もある。

仮に、現在のOSが永久に使えるものだと仮定してみよう。その場合でも、アプリケーションの問題は残る。一太郎やMSワードやエクセルが、永久に存在する保証はどこにもない。ましてやマイナーなソフトの場合、将来は開けなくなることを前提にして使った方がいいだろう。

組版の世界で言えば、電算写植の登場以来市場を支配してきたS社は、どうやら電算写植から撤退しようとしている（かのように見える）。とすれば、S社のシステムで組まれた出版物のデータは、近い将来、無用の長物となる可能性がある。もちろん、テキストデータぐらいは生かせるだろうが、出版物というのは、書体の選択から文字の大きさの決定、レイアウトまでを含めて「製品」なのであり、テキストデータだけが生かされたところであまり意味はないだろう。化けてしまった外字の復元だけでも大変な作業だ。では、どうすればいいのか。以上の問題を全て解決する方法は現在のところ存在しない。しかし、DTPをベースとした電子出版物の場合には、PDFというファイル形式によってかなりの部分をクリアすることができる。まずDTPによる出版物があつて、その二次利用としての電子出版を考える場合には、このファイル形式のもつ意味は大きい。そこで今回は、「PDFとは何か」について書いてみたいと思う。

一五分で読む「歴史」

二十世紀も残りわずか。戦後世界を規定していた冷戦構造の解体から十年、激動しボーダレス化する時代の中で、歴史学はいま大きく揺らいでいる。戦後歴史学をリードしてきた唯物史観・階級闘争などで示される社会構成史という方法は影響力を失い、グラランドセオリー、グラランドデザインの衰退は誰の目にもはっきりしてきた。さらに歴史学の最も固い基層を形成していた、実証史学と言われる「史料批判を基本とした実証的な研究方法」ですら、社会科学全体に訪れたパラダイムシフト「客観的事実とは何か」という認識論的問いを突きつけられ、相対化の波の中で激しく揺さぶられている。「歴史学が歴史を語る特権性を失った」(成田龍一)と歴史学者自らが語るように、これまで歴史学がフィールドとしてきた研究領域でも、社会学や文学、民俗学、教育学、政治学など他分野の研究者、国の枠を越えた諸外国の研究者の手による優れた研究が相次いでいる。時代区分や地域区分の見なおしが語られるとともに、社会史や八〇年代以降に登場した世界システム論、ネットワーク論、国民国家論、ポストコロニアル、ジェンダー、カルチュ

歴史書販売研究会

ラル・スタディーズ、パブリック・メモリーといった新しい歴史認識の方法論、さらに絵画史料や発掘史料、建築物や道具・衣服・武器、伝承史料やオーラルヒストリー(聞き取り)、自然環境や景観、映画やビデオなど歴史研究の素材となる史料も文字史料以外に様々に広がっている。そして歴史を語る言葉として硬質な学術用語ではなく、「ここから」「からだ」「きずな」といった日常語さえ使われるようになってきた。私たちの仕事の現場である書店の店頭にあふれる多数の歴史書は、こうした多様化する歴史学の現在を見事に表現しているのかもしれない。しかし、研究の広がり、売行きが広がりと広がりがあってはならないのも、もう一つの現実である。私たちの扱べき読者と歴史書はどこにあるのかを探ってみよう。

歴史系専門研究者―専門書を買う人々

大学生協や購買部でない限り、歴史の専門研究者が日常的な顧客として現れる書店は少ないと思われるかもしれない。しかし高額の『古代律令制の王権構造の研究』(架空)

といったタイトルの専門研究書が全く売れないということでもない。巷の研究者とも言うべき人々は確実に存在している。そうした人々でもほとんどは何らかの学会・研究会に所属している。歴史研究系の学会では史学会（史学雑誌）、歴史学研究会（歴史学研究）、日本史研究会（日本史研究）が三大学会と言える（カッコ内はそれぞれの機関誌名）。この三団体と日本歴史学会（日本歴史）は三千人を超える会員数がある。日本史研究会と日本歴史学会は日本史のみだが、歴史と史学会は世界史も対象にしている。この他にも歴史科学協議会（歴史評論）、京都大学を中心にした史学研究会（史林）といった会員数が千名を超える研究団体がある。また考古学の日本考古学協会（日本考古学）の会員数は三千五百名を超える。ここには各自治体の文化財担当者がほとんど所属しており、春秋二回の大会は遺跡の発掘調査報告書などの販売でバーゲンセールなみにぎわいとなる。分野別の学会・研究会でも日本古文书学会、地方史研究協議会、といった大規模な学会から、テーマごとに歴史地理学会、正倉院文書研究会、戦国史研究会、比較文化研究会、総合女性史研究会、日蘭学会、関東近世史研究会、江戸遺跡研究会、洋学史研究会、世界史系の西洋史研究会、比較都市史研究会、朝鮮史研究会などなど挙げていったらきりがない。それぞれの学会が編集する単行本も多いから、歴史書担当者なら聞き覚えのある学会もあるはずだ。

それでは歴史研究者の総数はどのくらいになるのだろうか。もちろん研究者はいくつもの学会に所属しているから、単

純に足し算しても実数はでてこない。歴史系出版社の調査などによると、何らかの学会に所属する歴史研究者は全国で二万人くらいと推計されている。これに周辺の国文学、仏教・宗教学、民俗学などを加えて、だいたい三万人ほどが歴史専門書を購入するコアの部分と言えるようだ。職業で言えば大学、短大、高等学校などの教員、博物館・美術館・図書館といった文化施設の学芸員や司書、教育委員会・埋蔵文化財センターなどの文化財担当者などの公務員、寺院の僧侶や神社の神主、少ないけれど新聞社・放送局などのマスコミ関係者や作家・評論家といったところか。また、大学で歴史関係の学科があるのは約一〇〇大学、大学院まで設置されているのはそのうち約七〇大学。自店の商圏にこうした大学があるかどうかはチェックしておく必要があるだろう。これは『歴史学がわかる』などの「アエラムック」（朝日新聞社）で調べれば簡単に分かる。ただし現在の大学生が活字離れしているのも事実だ。大学生協関係者の話によれば、教科書や語学の辞書ですら買わない学生が増えていくという。だから大学院生以上が初めて専門書の読者対象となる。不況下の就職難の時代なのでオーバードクターや研究生、特別研究員といった人たちが再び増加傾向にある。この専門研究者たちは一般新刊書店では、自分の専攻分野の研究書は買わないかもしれない。割引のある生協や研究室出入りの外商部、古書店から購入することも多いだろう。ただし、情報を求めて書店には必ず訪れている。いかに専門家といえどもこの出版洪水のなかでは、書店で実物を確

認することが一番簡単で安心できる情報入手法なのだ。人文系研究者は本好きが多いから、推理小説かもしれないし、最近使い始めたパソコンのマニュアル本かもしれないが、何かは買っていくはずだ。こうした地域のオピニオンリーダーとも言うべき人々をどう自店の顧客としていくのか。品揃えだけでなく、接客にも注意をしようまくいけばその知識も利用させてもらう。そこまで行けば「合格」である。

歴史愛好者―裾野を支える人々

一九九七年全国を巡回した「古代出雲文化展」は約三十万人を動員し、二五〇〇円した図録は四万部も売れたという。今年の「大ザビエル展」などの歴史関係の展覧会も盛況が伝えられている。また、博物館などで開かれるシンポジウム、人文会が昨年開催したような歴史学者を講師に招いての講演会、市民講座などの会場は、いつも多数の聴衆であふれている。こうした会場で目立つのは中高年の女性と老年の男性だ。いわゆるカルチャー族と呼ばれる人たち

◆豊かな臨床の知と自己体験を交えて語る

こころと人生

社元創
河合隼雄 著

心の子育て、不登校の原因、中年危機、死を迎える心がまえ等々。様々な時期での悩みの克服を、こころの専門家が説き明かす人生読本。本体1400円

である。何しろ金と暇と好奇心がある。旅行がてら現場へ出向くのもこの人たちだ。少し旧聞になるが、昨年一月に大量の三角縁神獸鏡が発見され話題となった、奈良県天理市の黒塚古墳の現地説明会には二日間二万二〇〇〇の人たちが押し寄せたとか、佐賀県の吉野ヶ里遺跡や青森県の三内丸山遺跡が年間数十万人を超える見学者を集めた、などエピソードには事欠かない。こうした中高年の人たちが、歴史書の重要な読者であることは間違いない。ある歴史書系出版社の読者カードの分析によると、一番多いのが六〇歳代で三〇%、四〇歳以上が八〇%という占有率だという。恐るべし中高年の歴史愛好者パワーといったところか。退職公務員、退職教員が多いのも特徴的だという。この人たちは研究者レベルの学会ではなく、「* * 町史談会」とか「* * の歴史を知る会」と言った地域の地域史、郷土史や民俗研究の同好会的グループに所属していることも多い。最近、岩田書院から出版された『地方史文獻年鑑』一九九七年版には、全国で約一三五〇団体（このすべてが郷土史研究団

◆心の声を聴くには、どうすればよいか

河合隼雄の

好評第7刷

カウンセリング入門

聴く、ひたすらに聴く。そして相手が立ちあがってくるのを待つ。著者自身が実技指導を通して伝える基本の基本。本体1400円

〒541-0047 大阪市中央区淡路町4-3-6
〒162-0801 東京都新宿区山吹町334-11
☎06-6231-9010 ☎03-3269-1051

体ではないが)が掲載されている。歴史系のブックフェアなどを企画したときには、このような団体の事務局などに案内するのも効果的だろう。「亀の甲より歳の功」で世話役の人たちは意外なほど親切だ。

もうひとつ忘れてはならないのは、大衆歴史雑誌だ。戦国時代、幕末、名君、大河ドラマ、家系の調べ方など繰り返される企画。読者にとってはマンネリも一つの魅力なのかもしれない。媒体資料で各誌の部数などを調べてみた。『歴史読本』(新人物往来社)は発行部数一〇万部。「歴史に親しみ、楽しみ、学ぶ場。歴史を作る」をコンセプトとしている。「別冊」や「増刊」、「事典シリーズ」など多彩なラインナップが売りだ。『歴史と旅』(秋田書店)は発行部数二万部。「日本人の歴史と旅好き」に焦点を合わせている。購読者は関東四〇%、近畿二〇%、男女比率は七八対二二。「旅」というキーワードがあるので女性が購読者に多いことを、売り物にしている。年齢層は先ほどの出版社の読者カードに近似していて、二〇歳〜三〇歳代が四〇%、四〇歳代二五%、五〇歳代十三%、残りは書かれていないが六〇歳以上とすると二二%になるから過半数が中高年ということになる。職業は会社員が三〇%となっている。最も後発で最も発行部数が多いのは『歴史街道』(PHP研究所)で二〇万部。「歴史と現代を結ぶ、ビジネスマンのための歴史雑誌」をコンセプトとしており、会社員が購読者の五七%を占めている。年収で五〇〇万円〜一千万円未満の層が三八%となっていて、年齢層は四〇歳代以上が六〇%を越えている。

男女比は八対二となっている。

こうしてみてみると私たちにとって最も確実な読者とは中年のサラリーマンや教員、さらに停年後の年金生活者、中高年のカルチャーマダムといったところになるだろう。もちろん十代、二十代の若者の中にもカルト的歴史愛好者がいるのも確かだ。今年の「歴史能力検定試験」の受験者を見ると約半数は高校生だし、大学生も合わせれば七割にもなる。ただしこの検定は始まったばかりで、余りにも絶対数が少ない。読者を育てる意味で、店頭フェアなどで出来るだけ盛り上げる必要がある。しかし、概ね現代の若者は歴史書を読まない。特に日本史は敬遠される。そもそもなじみが薄いのだ。平成元年の学習指導要領の改訂で、高等学校では世界史必修、日本史は選択科目となった。小学校・中学校の社会科で日本史を中心に学ぶとはいえず、約四割の学生は高校三年間で日本史を全く学ばずに卒業している。さらにセンター試験では日本史は点数がとれないとの情報もあり、日本史を選択する受験生が減少している。学力の低下もあって、ますます「日本史離れ」が進む。「漢字、年号、地名、歴史用語」はイコール「読めない、重い、ダサイ、疲れる」となる。ちょっと極論になってしまいが、取りあえず現状では一般書店の歴史書売場のコンセプトは「オジサン、オバサン、オジイちゃんいらっしやいませ。」とすべきだろう。何より接客が重要である。もちろん、最も大切なのは自店の顧客を正確に把握することで、そこから品揃えや接客、フェア企画なども考えるしかない。

溢れる歴史書一年間四二五〇点の新刊

『史学雑誌』（山川出版社）は毎年五月に前年の歴史学世界の総括を行う「回顧と展望」号を刊行する。「歴史学の現状」を確認するために、一番便利な内容となっている。店頭でもよく売れる。価格も今年の号で本体二八八六円だから、単行本なみだ。これまで不扱いだった書店はぜひ置いたほうがよい。最後に売れ残ったら自分で買って、読むこと。細部は難しくても、人文書担当として役立つ知識を必ず得ることができると思う。さて、話を本題に戻そう。

今年の「回顧と展望」号の「歴史理論」欄は次のように始まる。「いまさらとはいえず、街の書店や大学の生協書籍部に立ちよるたびに、出版点数の洪水には驚かされる。歴史関係の書物の出版も盛んである」。さらに「古代」欄も「昨年の古代史研究をふりかえると、洪水とでも表現できるような研究書出版点数の多さにまず立ちすくむことになるだろう」と出版物の多さ感嘆する表現で始まる。確かに歴史書の新刊点数は増加の一途だ。『出版年鑑』によれば、一九八九年に二五六一点だった歴史分野の新刊が、九八年には四二五〇点とほぼ一・七倍となっている。地理・紀行書を除いても、九六年に二〇九四点、九七年が二二七七点、九八年が二二〇四点と相変わらず漸増傾向にある。これを分野別にすると日本史が約半分弱の一〇二二点、伝記が七五七点、歴史総記が一四八点、地方史が二〇〇点、世界史が三五九点になる。月別の刊行点数は二月、八月、九月が二〇〇点

台、四月が四〇〇点台、後の月が三〇〇点台で、ほぼ一日当たり十点以上の新刊が刊行されていることになる。さらに、書協の書籍データベースで既刊書を調べてみると次のような数字が得られた。歴史総記Ⅱ三〇九点、日本歴史Ⅱ一万四二二九点、外国歴史Ⅱ四七三九点、伝記Ⅱ三三七六点、民族風習Ⅱ三五五一点、地理Ⅱ二二三七七点、合計三万八八一点。書籍データベース全体で五七万点だから、出版物の五％強が歴史とその隣接分野ということになるのか。これをすべて在庫するとなると、仮に一段に四五冊入るとして六段階で一一四本、勿論こんな量を置くことのできる書店など今のところない。

これだけ大量になると、専門研究者ですら悲鳴を上げるのだから、書店の現場で何が売れ何が売れないか判断するのは不可能に近い。研究書だけでなく、一般書でも新書、選書の創刊なども続き、著者の取り合い、類似企画やテーマの重複、員数合わせの新刊なども目立つ。「貧すれば鈍す」とはよく言ったもので恥も外聞もない類似企画も多い。たとえばNHK大河ドラマものという分野（？）がある。今年には「忠臣蔵」だから昨年から関連書の出版が相次ぎ、五〇数点の関連書が刊行された。大手書店のPOSデータで見ると、そのうちまとも売れたのは十点到り満たない。恐らく今年の後半は『徳川家康百科』『早分かり徳川三代』といった関連書が山のように刊行されるだろう。八割は売れないと思うべきだ。また、専門書分野で新刊の増加に拍車をかけているのが、人文系博士号の大量授与だ。当然博

士論文も大量生産される。五年ほど前に東京大学出版会のPR誌『UP』で(W)氏が危惧していたように、「印刷公表」を義務付けられているため、「読者不在」に近いこれらの論文が単行本として次々と刊行されることになる。私たちに出来ることは、自店や出版社から提供されるデータをじっくり読むこと、お客様や版元営業マンからの情報を大切にすることしかない。

売上データに見る歴史書

今回本稿を書くためにいくつかの書店、生協、出版社の協力で売上データを集めた。これに『論座』の「書評データベース」や『アエラムック』の「わかる」シリーズ（これが店頭の必備アイテムである）、大学生協連「人文書定番リスト」、「史学雑誌」などから、分野別にトピックや注目すべき著者とその編著書（売上データ、書評データに掲載されているものを選んでで新刊書中心となっている）をあげた。あくまで私たち研究会の見解であって、漏れも多いと思うがご勘弁いただきたい。敬称は略させていただきます。

〈歴史一般〉

なんと言ってもビジネス書感覚の編集が新しい『早わかり日本史』『早わかり世界史』（日本実業出版）が圧倒的人気だ。内容的には高校教科書の「研究版」である『詳説日本史研究』『詳説世界史研究』（山川出版社）がよく出来ている。年表・歴史地図、図録でも学習参考書を一般書に仕立てた『日本史年表・地図』『世界史年表・地図』（吉川弘文館）、『地

図で訪ねる歴史の舞台』（帝國書院）、『日本史総合図録』（山川出版社）が有力。『歴史新聞』（日本文芸社）系のブームは落ち着いた。年末年始の『歴史手帳』（吉川弘文館）も欠かせない。一冊ものの辞典では『角川日本史辞典』（角川書店）が価格の安さもあって『日本史広辞典』（山川出版社）を一步リード、そこへこの秋に岩波書店が『岩波日本史辞典』で参入する。「販売Q&A」で比較するY社とは？『イミダス』並の現代関係の項目が読者にアピールするのだろうか。スペースさえあれば、いっそのこと『国史大辞典』全十七冊（吉川弘文館）を揃えてしまうのも、お客様へのアピール度としては強烈か。索引が充実しているから、悩まされているカルト系の質問の回答用に使える。

歴史読物では陰陽道・神道関連が好調、『図説日本呪術全書』（原書房）『陰陽道の本』『安倍晴明』（学習研究社）滝沢解『陰陽道物語』葉室頼昭『神道のこころ』（春秋社）岡田精司『神道の謎を解く本』（洋泉社）などがある。邪馬台国関係も相変わらず「トンデモ本」系を中心に新刊点数は多いが、かつての勢いはない。郷土史ものは手堅い。山川出版社の県史シリーズや歴史散歩シリーズは当たり前過ぎるが、大阪なら『最新大阪ものしり事典』（創元社）、仙台なら『東北の交流史』（無明舎）、横浜なら『神奈川県史の戦争遺跡』（大月書店）と言った具合に、地元以外の出版社のものも地域関連書はできる限り拾っておきたい。新刊配本でも案外「ご当地物」に無頓着な出版社もあるので気をつけたい。古文書関連書もある程度は揃えたい。佐藤進一『古文書学入門』

(法政大学出版局) という名著、カルチャー向きの『寺子屋式古文書手習い』(柏書房)、辞典なら『くずし字解説辞典』(東京堂出版)、独習テキストなら『演習古文書選』(吉川弘文館)といった定番品を押さえておきたい。

〈総論〉

歴史学の現状を知るには福井憲彦『歴史学の現在』(放送大学教育振興会)が格好。放送大学のテキストだけに余り歴史書棚に置かれていないのが残念だ。戦後歴史学に対する鋭い批判を突きつける上野千鶴子『ナショナルリズムとジェンダー』(青土社)やその上野や歴史学のニューウェーブ派(?)から総スカンを受けた加藤典洋『敗戦後論』(講談社)『可能性としての戦後以後』(岩波書店)も歴史コーナーに置いてほしい。川勝平太『文明の海洋史観』(中央公論新社)は批判もあるが売行きは目立つ。歴史学の立場からの入門書として、石井進編『歴史家の読書案内』(吉川弘文館)、鹿野政直『化生する歴史学』安丸良夫『方法』としての思想史、(校倉書房)、小谷江之『歴史の方法について』(東京大学出版会)を

あげておこう。駒場発の義江彰夫他編『歴史の文法』(東京大学出版会)の軽やかさ、自由主義史観批判として編まれた小森陽一他編『ナショナル・ヒストリーを超えて』(東京大学出版会)の熱気も捨てがたい。

〈考古学〉

新聞報道等で遺跡の発掘のニュースが紙面をにぎわすことも多く、一般の人々にも関心が高い。遺跡保存運動なども市民ボランティアも加わって、様々な地域で盛りあがっている。その対象も人類誕生から旧石器、縄文、弥生、古墳時代から古代、中世、近世、近代の産業考古学と呼ばれる分野まで広がっている。とは言うものの考古学と言えは相変わらず森浩一『僕は考古学に鍛えられた』(筑摩書房)、国立歴史民俗博物館館長の佐原真『騎馬民族は来なかった』(NHKブックス)、縄文学の小林達雄『最新縄文学の世界』(朝日新聞社)の三人の人氣が突出している。伝統ある明治大学考古学の大家初重『古代の日本はここまで見えてきた』(同文書院)と戸沢充則。慶応大学の鈴木公雄の『考古学入門』

子どもという哲学者

ピエロ・フェルッチ／泉 典子訳

●1500円

子どもといると毎日が試練だが、いったん子どもも目線に立つてみると、すべてが新鮮に見える。心理学者による全く新しい子育て論。

草思社

孤独な帝国日本の一九二〇年代

ポール・クロードル／奈良道子訳

●2500円

英米提携下で孤立を深める近代日本の転換点を描く。

黄禍論とは何か

ハインツ・ゴルヴィツァー／瀬野文教訳

●1900円

黄色人種への偏見を煽った欧米諸国の言説を網羅。

150-0001 東京都渋谷区神宮前4-26-26
☎03(3470)6565 価格は税別です。

(東京大学出版会) は入門書として定評がある。発掘調査はパブル期より減ったとはいえ、毎年の『発掘された日本列島』(朝日新聞社) は必備アイテム。『季刊考古学』(雄山閣出版) は特集が多いので、タイムリーな話題と組み合わせさせて品揃えに生かしたい。学生社からも『黒塚古墳』のようなイキのよい企画が出るので要注意。自然人類学と重なって来るが、「日本人の起源論」も人気テーマだ。柄谷行人、酒井直樹らによって、近代国家の産物にすぎない日本人観をそのまま始源に投影する「遠近法的倒錯」と批判されるが、この倒錯が心地よいのが「日本人」の証拠か。この分野では大御所的な埴原和郎『日本人の誕生』(吉川弘文館・歴史文化ライブラリー/以下ライブと略す)、日本人の骨の鈴木尚『骨が語る日本史』(学生社)。マンモスハンターの木村英明にも注目しておきたい。縄文研究は青森の三内丸山遺跡の発掘以来、大集落で豊かな進んだ生活があったとする社会的集落構成派対見直し派の論争が活発となった。環境考古学の安田喜憲『縄文文明の環境』(吉川弘文館/ライブ)、縄文文明見直し派は今村啓爾『縄文の実像を求めて』(吉川弘文館/ライブ)をあげておこう。弥生から古墳時代研究では大阪府立弥生文化博物館館長金関恕『考古学は謎解きだ』(東京新聞)、都出比呂志(編)『古代国家はこうして生まれた』(角川書店)、国立歴史民俗博物館考古研究部の白石太一郎(編)『古代を考える古墳』(吉川弘文館)、古墳研究の広瀬和雄、宗教研究の春成秀爾、九州をフィールドとする高倉洋彰『金印国家群の時代』(青木書店)、武末純一『土器からみた日韓交渉』

(学生社) などがいる。このほかの注目すべき研究者をあげておく。平城宮発掘/町田章、古鏡/岡村秀典、動物考古学/松井章、仏教考古学/上原真人、古代都城論/山中章、中世考古学/小野正敏。

〈古代〉

古代史研究の問い直しが叫ばれている。細分化、専門化した研究状況の中で、問題意識が希薄になり、古代史学全体が「窒息状態」に陥っていると指摘する古代史研究者もいる。井上光貞(故人)、土田直鎮(故人)、岸俊男(故人)、関晃(故人)、竹内理三(故人)、早川庄八(故人)、西嶋定生(故人)、家永三郎、直木孝次郎、横田健一、平野邦雄、田中健夫、門脇禎二、青木和夫、上田正昭などといった人々が切り拓いた、戦後古代史学の地平をどう継承し、発展させるのか。考古学・地理学などの他分野との総合的研究や史料の見直し、女性史や社会的視点、「古代史を安易に一國(二民族)中心や中央政府中心に読むことなく、国際的視座や地域の史座から相対化するという視点」(佐藤信)がますます重要となってきた。私たちの立場から言わせてもらえば、「販売」を成立させるために、大衆性と研究の深さを併せ持ったスケールの大きな編著を期待したい。さてランダムに注目すべき著者をあげてみる。笹山晴生、吉田孝『日本の誕生』(岩波新書)、鬼頭清明、鈴木靖民、和田萃(編)『古代を考える 山辺の道』(吉川弘文館)、栄原永遠男、東野治之、吉村武彦『古代天皇の誕生』(角川書店)、考古学や国文学との学際的研究を積極的に進める佐藤信、漆紙文書や墨書土

器の研究で知られる平川南、アジアの視点から古代史を捉え返す李成市『東アジアの王権と交易』（青木書店）・森公章『白村江』以後（講談社・選書メチエ／以下メチエと略す）、史料学の体系化を目指す石上英一、対外交渉史の石井正敏、撰録時代研究の加藤友康、都城研究の仁藤敦史・山中章、仏教史の本郷真紹、女性史の義江明子、服藤早苗、滝浪貞子、政治史の大津透、古代政治構造論の吉川真司、衣服史の武田佐知子『衣服で読み直す日本史』（朝日新聞社）、平安朝文化史の勝浦令子、初期武家研究の元木泰雄、古代王権論の荒木敏夫。通説に対し刺激的な発言で話題を呼ぶのが遠山美都男『彷徨の王権 聖武天皇』（角川書店）と大山誠一『聖徳太子』の誕生』（吉川弘文館／ライブ）。

〈中世史〉

言うまでもなく網野善彦が圧倒的人気だ。網野が『無縁・公界・楽』（平凡社）で提示した新しい中世史像は多くの読者の支持を得た。そのほかの優れた研究者も参加して様々な方法論やテーマの研究が次々と発表され、中世史は最も活気のある分野となった。佐藤進一、永原慶二、福田豊彦、村井康彦、石井進、笠松宏至、上横手雅敬、大石直正、大隅和雄、峰岸純夫、大山喬平、勝俣鎮夫、羽下徳彦、脇田晴子、横井清、といった長い研究歴を誇るベテラン研究者の著作も相変わらず活発に刊行されている。中でも戦国史の藤木久志『戦国の村を行く』（朝日新聞社）とユニークな王権論で知られる今谷明『謎解き中世史』（洋泉社）の人氣は高い。一般向けの入門書を多く手がけている戦国史研究の

小和田哲男『呪術と占星の戦国史』（新潮選書）も当たりはずれが少ない。これに次ぐ世代では、文字史料から絵画・文学作品まで幅広い目配りで常に中世史研究の中心にいる五味文彦『平清盛（人物叢書）』（吉川弘文館）、絵画研究などでポレミックな発言も多い朝日新聞の書評委員でもある黒田日出男『謎解き日本史』（NHKブックス）、『知の技法』以来の駒場物の立役者の一人である中世王権論の義江彰夫、東アジアとの関わりを重視する対外関係史の村井章介『中世日本の内と外』（ちくまプリマーブックス）、武士職能人論の高橋昌明、経済史の桜井英治、中世前期社会史の川合康『源平合戦の虚像を剥ぐ』（講談社／メチエ）・山本幸司『頼朝の精神史』（講談社／メチエ）、日記・記録研究の松蘭斎、一向一揆研究の神田千里、社会史の保立道久『物語の中世』（東京大学出版会）・藤原良章・丹生谷哲一、中世文化史の千々和到、戦国史研究の池享・池上裕子・山田邦明、法制史の近藤成一・新田一郎、宗教史の西山克『聖地の想像力』（法蔵館）・細川涼一『中世寺院の風景』（新曜社）・松尾剛次、城郭史の小島道裕、古文書学の湯山賢一、村落社会史の久留島典子・酒井紀美『中世のうわさ』（吉川弘文館）、武器・武器具研究の近藤好和『弓矢と刀剣』（吉川弘文館／ライブ）・宇田川武久・藤本正行『戦国合戦の常識が変わる本』（洋泉社）、海民史の金井匠人『海賊たちの中世』（吉川弘文館／ライブ）・山内譲『海賊と海城』（平凡社）、ジェンダー美術史の千野香織、南北朝研究の伊藤喜良、都市史の仁木宏『空間・公・共同体』（青木書店）、在地社会情報論の別格として守備範囲

を近世にも広げた山室恭子『黄門さまと大公方』（文春新書）がいる。とてもお堅い歴史学者とは思えない謎解き趣向の独特の語り口で人気は根強い。さらに若い世代では考古学専攻の中世史研究者が増えており、文献史学との交流も盛んで、シンポジウムなどもひんばんに催されている。今後の中世史研究に大きな影響を与えることになるだろう。

〈近世史〉

山口啓二『鎖国と開国』（岩波書店）、尾藤正英『江戸時代とはなにか』（岩波書店）、田原嗣郎、佐々木潤之介、塚本学、林玲子、朝尾直弘、脇田修、竹内誠、深谷克己、といった、戦後日本近世史を様々な分野でリードしてきた第一世代、それに続く団塊の世代の研究者たち、さらに彼らに「新人類」とまで呼ばれる若い世代の登場もあり、新旧入り混じって研究状況は流動化しつつある。近代と連続する近世という考え方と近世の固有性を強調する考え方、さらに文字史料以外の資料を使っての研究など「新しい近世史」のムーブメントが始まっている。年齢的には旧人に属する田中圭一『日本の江戸時代』（刀水書房）は江戸時代封建制論に対する否定の書、「土農工商」という身分制も虚構だとする。PR誌『刀水』創刊号掲載の田中・網野対談は放談のきらいはあるが刺激的だ。確かに、近年の近世史研究で注目されているのが身分と身分的周縁の問題である。「団塊の世代」の塚田孝、吉田伸之、高埜利彦、横田彦彦、久留島浩が「新人類」も巻き込んで組織した第二次身分的周縁研究会の成果は、いずれ吉川弘文館から刊行されることになるが、近世

身分制社会の解明が進み、研究者レベルでなく一般読者にも理解できる豊かな近世史Ⅱ江戸時代像が提示されることが期待される。それでは上述以外の注目すべき研究者を上げてみよう。近世後期の政治史の藤田寛、近世前期政治史の笠谷和比古・藤井譲治・山本博文『島津義弘の賭け』（読売新聞社）・平川新・松尾美恵子・福田千鶴、琉球史の高良倉吉『アジアのなかの琉球王国』（吉川弘文館／ライブ）、豊見山和行、北方史の菊池勇夫・榎森進、対外関係史の荒野泰典・真栄平房昭、政治思想史の渡辺浩『東アジアの王権と思想』（東京大学出版会）、ジェンダー論の藪田貫、社会史の氏家幹人『不義密通』（講談社／メチエ）、都市論の玉井哲雄（編）『絵巻物の建築を読む』（東京大学出版会）、近世村落史の渡辺尚志『江戸時代の村人たち』（山川出版社）、江戸学のタイモン・スクリーチ『大江戸視覚革命』（作品社）『春画』（講談社／メチエ）『江戸の思考空間』（青土社）、経済史の賀川隆行。

〈近現代史〉

「歴史観論争」が続いている。歴史研究者の側からも小林よしのりの『戦争論』などいわゆる「自由主義史観」派（一方からは「歴史修正主義」と呼ばれる）に対する批判や分析がおこなわれている。「歴史を社会統合の手段として理解するそうした彼らの立場を批判することは、一見簡単なようであるが、じつは難しい」（『史学雑誌』一九九八年の回顧と展望）のも確かだ。昨年から中央公論新社の伊藤隆他編『日本の近代』の刊行が始まった。「二十一世紀の日本の指針となる近代史」という宣伝コピーが示すように、松本健一『開国・

維新』、御厨貴『明治国家の完成』、水谷三公『官僚の生態学』といったような重厚な編成だ。こちらをオーソドックスな歴史学の立場とするなら、「これまでの近代史のあり方を大胆に問い直し、新たな歴史像を示そう」というのが、吉川弘文館の『ニューヒストリー近代日本』だろう。第一回配本の牧原憲夫『客分と国民のあいだ』、成田龍一『故郷』という物語、刊行予定にも高木博志『〈聖地〉大和の創造』、吉見俊哉『デパートの誘惑』、米山リサ『近代と笑いの表象文化』といったユニークなタイトルが並ぶ。新しい立場と言えば、小熊英二（歴史社会学）『単一民族神話の起源』、『日本人』の境界』、酒井直樹（比較思想史）『死産される日本語・日本人』（新曜社）といった異分野からの取り組みも人気となっている。さて、近現代史についても田中彰、鹿野政直、高村直助、江口圭一、伊藤隆、由井正臣、安丸良夫、中村政則、板野潤治といった第一世代の研究者に続く人々を挙げてみる。明治維新史研究の井上勲・井上勝生・三谷博・宮地正人・松尾正人、近代天皇制研究の鈴木

正幸・高木博志・安田浩・タカシフジタニ『天皇のページェント』（NHKブックス）、経済史の大豆生田稔・鈴木淳、政治史・満州国研究の山室信一『キメラ』（中公新書）・塚瀬進『満州国』（吉川弘文館）（満州ものには要注意、芳地隆之『ハルビン学院と満州国』（新潮選書）や小林英夫『満鉄』（吉川弘文館）もよく売れた）、国民国家論批判の小路田泰直『国民（喪失）の近代』（吉川弘文館）・西川長夫『国民国家論の射程』（柏書房／年齢も上だし、専門もフランス思想・文学だがこうした歴史学への提言も多い）、戦争責任論の野田正彰『戦争と罪責』（岩波書店）、軍制研究の加藤陽子・山田朗、従軍慰安婦問題で論陣を張る吉見義明、自由民権運動の新井勝紘・鶴巻孝雄・稲田雅洋、日露戦争史の小風秀雄・井口和起、表象研究の長志珠絵、教育史の広田照幸『陸軍将校の教育社会史』（世織書房／サントリー学芸賞）、ジェンダー論の早川紀代『近代天皇制国家とジェンダー』（青木書店）・菅聡子、戦後史政治史研究の五百旗頭真『占領期』（読売新聞社）、羽賀祥二が『史蹟論』（名古屋大学出版会）で、絵図を史料として歴史認識を

思考の21世紀はすでにじまっています。

ミシエル・フリーコー思考集成 全10巻

○監修 蓮實重彦 渡辺守章 ○編集 小林康夫 石田英敬
松浦寿輝 20世紀最大の思想家ミシエル・フリーコー 哲
学・思想・政治学・歴史学・文学・心理学…を横断し侵犯し
続ける強烈な思考の全体像を初めて明らかにする画期的集成。

▼好評既刊 I/5200円 II・III/5800円
I 狂気／精神分析／精神医学（1954-63）年譜付
II 文学／言語／エヒステモロジ（1964-67）
III 歴史学／系譜学／考古学（1968-70）

詳細内容見本呈

筑摩書房

サービスセンター 048-651-0053

*表示は本体価格（税別）

史蹟という空間の形成を論じたことが、近世・近代の幅広い研究者から注目を集めている。

〈世界史〉

中央公論社の『世界の歴史』が完結した。売上の的には歴史書コーナーの柱になっていただけに、頭が痛いところだ。世界史については紙幅の都合もあるので簡単にふれるにとどめる。阿部謹也『物語ドイツの歴史』（中公新書）、二宮宏之『歴史学再考』（日本エディタースクール出版部）、福井憲彦『新しい歴史学』とは何か（講談社学術文庫）、樺山紘一『世界を俯瞰する眼』（新書館）、木畑洋一『大英帝国と帝国意識』（ミネルヴァ書房）、山内昌之『二十世紀のプリズム』（角川書店）、近藤和彦『文明の表象英国』（山川出版社）、岡田英弘『皇帝たちの中国』（原書房）、ネットワーク論／ベネディクト・アンダーソン『想像力の共同体』（NIT出版）、世界システム論／イマニエル・ウォーラスティン『史的システムとしての資本主義』（岩波書店）、アナル学派／リュシアン・フェーヴル『歴史のための闘い』（平凡社ライブラリー）、フェルナン・ブローデル『地中海』（藤原書店）、フィリップ・アリエス『〈子供〉の誕生』（みすず書房）。ポール・リクール『時間と物語』（新曜社）、ガヤトリ・スピヴァック『サルタンは語れるか』（みすず書房）、エドワード・サイード『オリエンタリズム』（平凡社ライブラリー）、アラン・コルバン『における歴史』（藤原書店）、創元社／『知の再発見叢書』、山川出版社／世界史リブレット、歴史のフロンティア、柏書房／パルマケイア叢書。世界史関連のブックリストに作

品社製作の「カルチュラル・スタディーズ関連書目リスト」がある。非常に詳細で網羅的なリストで便利だ。

歴史書情報をどう知るか—インターネットも役立つ

歴史学のトレンドを知るために『アエラムック』（朝日新聞社）が良く出来ている。「歴史学」「考古学」「幕末学」「元禄時代」関連分野で「民俗学」「宗教学」「社会学」「人類学」「アジア学」が出ている。人文会の製作した『CD-ROM 版人文書基本図書検索システム』も書店のベテラン棚担当者を選定したデータで信頼性が高く、欠本調査やフェアの発注書としても利用できる。今年も改訂版が10月に出る予定。歴史専門雑誌では『日本歴史』（吉川弘文館）の広告頁と「新刊書案内」欄が充実している。「歴史評論」（校倉書房）の特集にも注意しておきたい。十月号ではインターネット特集を掲載している。歴史雑誌ではないので見落としがちだが、『思想』（岩波書店）、『大航海』（新書館）、『現代思想』（青土社）、『國文学』（学燈社）などの特集にも歴史関連がある。出版社のPR誌では吉川弘文館『本郷』『歴史潮流』欄が「歴史研究の最前線」を紹介する。歴史書懇話会の『歴史書通信』は会員一八社の新刊だけでなく重版情報も掲載されていて役立つ。東京大学出版会『UP』、筑摩書房『ちくま』、未來社『未来』、春秋社『春秋』などでも折に触れて歴史関連のエッセイが掲載される。岩田書院が発行元になっている「地方史情報」は、地方史研究雑誌の目次や地方出版物の発行先・内容紹介が掲載されている。同社の新

刊ニュース「裏だより」は出版社の本音が聞けて面白い（出版目録に再録されている）。

情報収集ツールとしてのコンピュータはインターネット環境の整備も進み飛躍的に活用範囲が広がった。書籍検索は書協のbooks (<http://www.books.or.jp/>) が七月から今年の新刊が更新され、今後は月次で更新される。一応は粗いけれど在庫情報の役目も果たす。図書館流通センター (<http://www.trc.co.jp/>) は内容紹介、表紙写真、著者紹介もまろてわかりやすい。紀伊國屋書店のブック・ウェーブ (<http://bookweb.kinokuniya.co.jp/>) は会員制で検索結果が非会員は十件までと制限されている。丸善 (<http://www.manzen.co.jp/>) のホームページも書誌検索システムをもっているが、営業時間が平日は午前九時から翌日の午前七時、土日が午前九時から午後九時となっている。紀伊國屋書店、丸善をはじめ八重洲ブックセンター (<http://www.yaesu-book.co.jp/>)、旭屋書店 (<http://www.asahiya.com/>)、三省堂書店 (<http://www.books.sanseido.co.jp/>) などのナショナルチェーン書店系のホームページには、ベストセラー情報なども掲載されているので参考になる。各地でホームページを開いている書店もあるが、把握しきれない。検索エンジンで探せば掘り出し物のページもあると思う。本と流通 (<http://www.bekkoame.jp/~much/>) というサイトには地方小出版流通センターの情報などもあり、再版問題アンケートなど一見の価値あり。古い書籍・雑誌なら學術情報センター (<http://webat.nacsis.ac.jp/>) と早稲田

大学図書館 (<http://www.wal.waseda.ac.jp/index-j.html>) が便利。出版社のホームページも完成度が上がり、それぞれの社のカラーが現れ面白くなってきた。人文会会員のURLは『人文会ニュース』の前号（八四号）に掲載されているが、図書館流通センターなどのホームページの出版社リンク集からも飛ぶことができる。新聞・雑誌書評のデータベースは朝日新聞の「論座」ネット (<http://opendoors.asahi-np.co.jp/span/ronza/net/index.htm>) にもある。個人が構築した歴史系リンク集には「博物館の博物館」 (<http://candy.hus.osaka-u.ac.jp/esthome/matusita/museum.html>) など使い勝手のよいものも数多い。各大学のホームページは学内の歴史系の学部や研究所などへもリンクしており、さらにその中に個人ホームページを作成している研究者もいる。たとえば東京大学 (<http://www.u-tokyo.ac.jp/index.html>) の史料編纂所の中には公式サイトのほか個人研究者のユニークなページがあって、モンテ・パイソンの話まで登場し飽きない。研究者のホームページをリンクしてある「歴史関係Webサイト調査」 (<http://www.ishinshi.net/~rweb/>) から個人ホームページを覗いてみるのも勉強になる。大学によっては学生に薦めている本のリスト等も公開しているから、ダウンロードして品揃えしてみるのもよい。歴史カルトのホームページのカウンター数を見ると意外なほど多いので驚かされる。まだまだ歴史ファンの裾野は広いと言ふことかもしれない。ニフティの「歴史フォーラム」 (<http://www.nifty.ne.jp/forum/frekishi/index.htm>) のリンク

集はリンク件数も多く面白い。いずれも個々のURLを入力するより、ヤフーなどの検索エンジンやニフティーなどのプロバイダーのトップページのカテゴリリストからアクセスするのが便利だ。

まとめにかえて

八月十五日の新聞に西尾幹二『国民の歴史』（扶桑社）の全面広告が掲載された。ここ数年来話題となっている自由主義史観の総決算的内容のようだ。「新しい日本が見える。〈日本人の誇り〉が聞こえる」と日本や日本人を強く意識した宣伝コピーが踊る。物語なき現代の歴史学は、この人たち語る「大きな物語」に對峙し、自らの名において何を語りうるのだろうか。どのような思想でも多くの人々を捉えることが出来る。わかりやすい物語は人間にとって大きな魅力だ。しかしその「物語」が悲劇を生むこともあることを私たちは忘れてはならないだろう。最後に一九五〇年代マッカーシズムの吹き荒れるなかで、自ら死を選んだカナダの歴史学者ハーバート・ノーマンの言葉を引いて終わりとした。

「歴史の研究は多くの人びとにとって、休息であり、喜びであり、楽しみでありうるとともに、それは結局最も教化力の大きな習慣であると私は確信する。人間はもし歴史をもたなかったら、動物と大差ない生活を送らなければならぬであろう。歴史はわれわれに過去に向かって旅をして、過ぎ去った世代の人びとの生活を精神的に共有するこ

とを許すものであるが、もっと重要なことは、それによってわれわれが全人類と平和的協同的に生活することができるようになるということである。歴史はどんな教訓にもまして、われわれを寛容に、人間的に、そしておそらく賢明にさえするものである」。

米国書店の現状

菱川摩貴

ついで七八年前まで「点数が少ない」「注文しても二〜三週間かかる」というネガティブなイメージが強かったアメリカの書店。しかし一九九〇年代に入り、「バーンズ&ノーブル（以下B&N）」「ポーターズ・グループ（以下ポーターズ）」の二大チェーンが拡大したことで、そのイメージと実態は大きく変貌した。さらに一九九四年ワシントン州・シアトル市で設立されたインターネット書店「アマゾン・ドット・コム（以下アマゾン）」の成長で、変化のスピードはますます高まっている。その移り変わりを簡単に追いつながら、アメリカの書店の現状をレポートする。

(一) 書店はエンターテインメント(娯楽)の場になり「スーパーストア」&「コミュニティストア」

二大チェーンは単なる「本の(安売り)スーパーマーケット」にとどまらなかった。…居心地のいい椅子とソファを用意、洒落たコーヒー専門店「スターバックス」を店の真ん中に配置した。ちょっとした講義や作文セミナー

も店内で開催。顧客は大学に戻ったような感覚を覚えることができた。…こうしてちょっとしたラウンジやディスカッション・グループ、コーヒーショップなど用意することで、「本屋」を「本を体験する場所」に変えたのである。—マイケル・ウルフ著『エンターテインメント経済』(一九九九年刊)

この「本を体験する場所」をB&Nは「コミュニティストア」と表現する。各地域コミュニティの一部として店を位置づけ、地域住民のニーズに合致した本、音楽CDをそろえる。各店舗には「コミュニティ・リレーションズ・コーディネーター」といった肩書きの店員が常駐し、著者のサイン会、討論会、児童への読み聞かせといった店内イベントを毎日開催する。地域住民に密着したイベントだから、各店舗によってスケジューリングは全く異なる。例えば、ワシントンDCの中心オフィス街に位置する「ポーターズ」店(写真1)は、平日昼間の三時間に全売上げの七〇%が集申し、顧客の大半がビジネスマンという典型的な都心タイプの店舗だ(写真2・3)。主要な顧客層が中高年とあって、毎

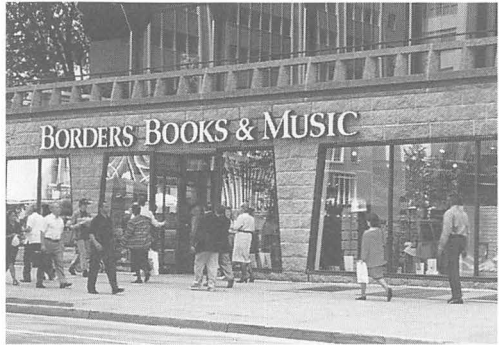


写真1 ワシントンDC「ボーダーズ」店。

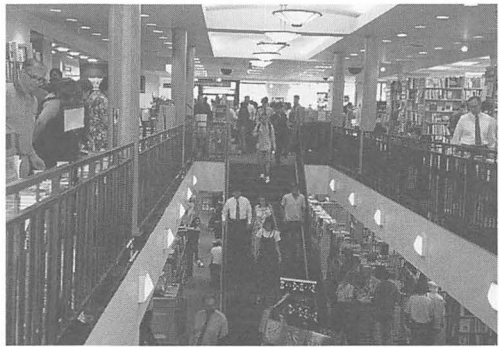


写真2 同店は昼間、サラリーマンでごった返す。

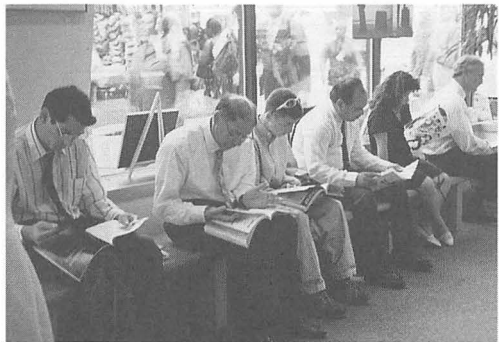


写真3 雑誌売り場前の椅子は、雑誌を閲覧する客で一杯だ。

週金曜日夜ジャズ・コンサートを催し、コーヒーと本を片手にお洒落な音楽が無料で聴ける「大人のバー」を演出する(写真4)。一方、子連れ客が少ない同店では、児童用イベントは週二回、本を読み聞かせるイベント程度だ。週末に家族連れが多いメリーランド州郊外の「ボーダーズ」店(写真5)が児童用に、工作や映画上映など多様なイベントを用意しているのと対照的だ。

「コミュニティストア」のコンセプトは二大チェーンが拡大する前から、地方の個人経営(独立系)書店や地方チェーン店でも採用されていた。例えば、今年春、「ブックセラ」・

オブ・イヤー」(業界紙が選ぶ年間書店大賞)に輝いたワシントンDCの独立系書店「ポリテイクス&プローズ」は、一九八四年、「あなたのコミュニティのための書店」を掲げオープンした独立系書店だ(写真6)。顧客の属するコミュニティのニーズに合わせた本を店頭におくのが信条で、ゆったりとした閲覧スペースを用意、カフェも常設する(写真7・8)。作家を招いたり、児童用に読み聞かせをするなどして、店内イベントを活発に催す。まさしくこのコンセプトを、平均店舗面積二万五千〜二万七千スクエアフィート、タイトル数六万〜一八万という超大型店、つまり「スーパースト

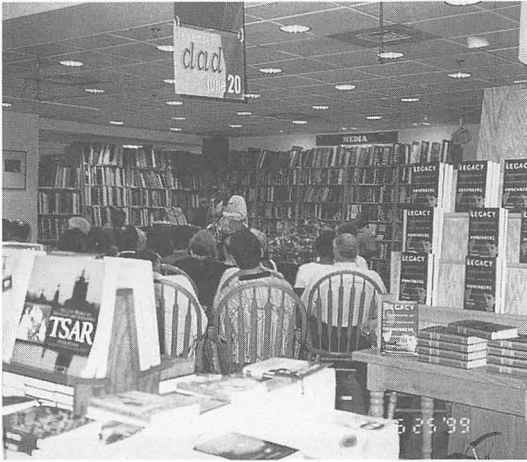


写真4 毎週金曜日夜7時から催されるジャズ・コンサート。必ず、50人ぐらいの中老年層が集まる。

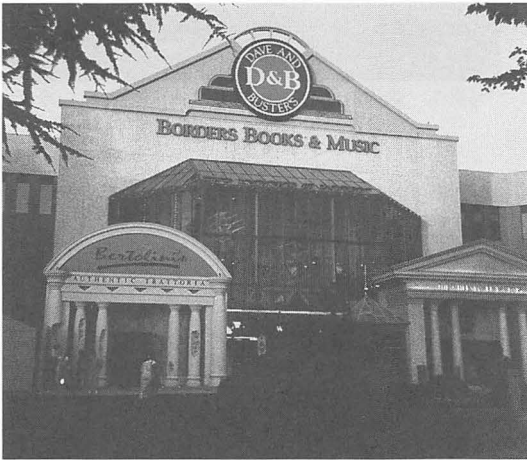


写真5 メリーランド州郊外の「ボーダーズ」店。

ア」の形態で、全米にチェーン展開したのが、B&Nとボーダーズだったのである。

一九三二年に創立したB&Nが「スーパーストア」を全国展開し始めたのは、一九八九年、チェーン店「ブックス・トップ」二三店舗を買収してからだ。以来、八店（九〇年）、二八店（九一年）、七八店（九二年）、七二店（九三年）、七〇店（九四年）、九七店（九五年）、九二店（九六年）、六五店（九七年）、五〇店（九八年）と急激なペースで開店していった。一九九九年一月時点でB&Nの「スーパーストア」

は計五二〇店舗。一九九九年中さらに五〇店舗をオープン、計一九〇万スクエア・フィートを追加する予定だ。一方、ミシガン州アナ・アーバー市の独立系書店だったボーダーズがB&Nと同様に「スーパーストア」の全米展開を本格化したのは、一九九二年、他業種チェーン店「Kマート」が同チェーンを買収して以降だ。B&Nに続けとボーダーズも年四〇〜五〇店舗の急ピッチで「スーパーストア」を開店、一九九九年三月時点で計二五六店舗数を達成した。ボーダーズは一九九七年から海外展開にも乗り出し、シンガポール、

オーストラリア、英国にも店舗を構えている。
結果、一九八六年から一〇年間でB&Nは売上げを一六九%伸ばし、一九九八年度総売上げ三〇億五〇〇万ドルを記録、ボーダーズも同期間一八九%の売上げ増を見、一九九八年度は二五億九五〇〇万ドルを達成、国内No.3のチェーン店「ブックス・ア・ミリオン」の売上げ三億四七九〇万ドル（一九九八年度）を大きく引き離れた。No.4のチェーン店「クラウン・ブックス」はかつて、「ニューヨークタイムズ・ベストセラー三〇%引き」といった安売り戦略で業界に価格破壊をもたらしたが、昨年夏、資金難に陥り会社更生法の適

用を申請、現在再建策を模索中だ。同チェーン店は、「安売り本屋」のイメージから脱皮できず、「スーパーストア」「コミュニティストア」への転換に乗り遅れた。また「スーパーストア」の拡大は、平均店舗面積二八〇〇〜六〇〇〇スクエアフィートのショッピングモール型書店チェーンの衰退をもたらした点も特筆すべきだろう。B&Nが所有するモール型書店チェーン「B・ダルトン」は一九九〇年以降平均四〇〜六〇店舗のペースで閉業され、現在四八九店舗に、ボーダーズ・グループに属するモール型チェーン「ウォルデンブックス」も同様の道をたどり、八八五店舗が開業中だ。

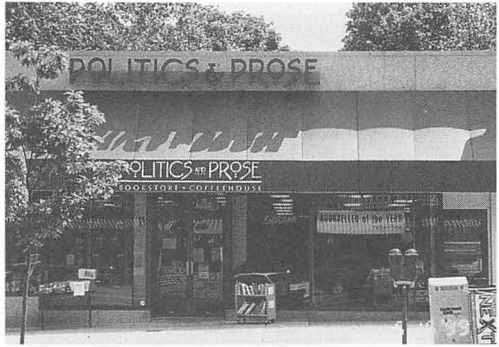


写真6 今年、「ブックセラー・オブ・ザ・イヤー」に輝いた独立系書店「ポリティックス&プローズ」。

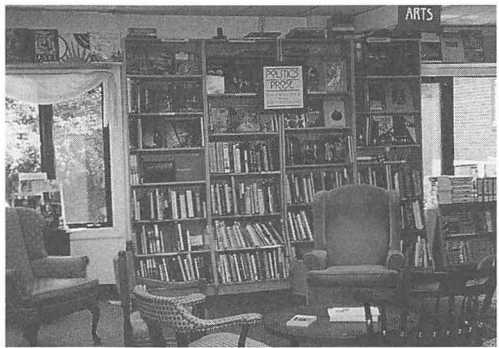


写真7 店内奥にある閲覧スペース。作家のサイン会・討論会は、この場で行なわれる。



写真8 店内のカフェ。

こうして拡大を遂げた二大チェーン店だったが、現在、一書店の出現と急成長を前に悪戦苦闘している。インターネット書店「アマゾン」だ。

(二) インターネット書店の出現と成長

ニューヨーク・ウォール街でヘッジファンドに従事していたジェフ・ベゾスは、年間二三倍の急成長を遂げていたインターネットの将来性に目をつけ、一九九四年「アマゾン」を設立、一九九五年七月にネット上で書店を開いた。書籍を選んだ理由としてベゾスは米ワシントンポスト紙記者に、①商品(タイトル)数が多い、②書籍市場には、他の業界と比べて圧倒的に独占力をもつ小売業者が存在しない、③コンピュータが顧客の欲しい本を見つけるのに有効なツールになりうる、以上三点を挙げている。場所としてワシントン州シアトル市を選んだのは同地域にハイテク企業が集まって環境が整備されていること、そして何とんでも最大手取次のイングラム社の配送センターが近接していたからという。誕生から現在に至る四年間、その急成長ぶりは世界中で常に注目されてきた。一九九五年末五一万一千ドルだった売上は、一九九八末には六億一千万ドルに達した。扱う商品は、書籍から、音楽CD(一九九八年六月)、ビデオ(一九九八年一月)と広げ、今年三月にはリアルタイムのオークションも始めた。顧客は一九九七年一〇月に一〇〇万人、さらに一九九九年六月、一〇〇〇万人を突破した。買収活動に

も積極的になり出し、昨年はイギリスとドイツのインターネット書店や米テレビ・映画情報ウェブサイトなどを買収、今年に入って既に、オンライン上のペット店、薬局、食料品店の株を次々と取得し、扱う商品の幅を広げる計画を明らかにしている。その目覚ましい成長と将来性に投資家は興奮、株価は急上昇し、上場した当初(一九九七年五月)の一八ドルから、今年に入って一時最高二二〇ドルを記録した。

その人気の秘密は、ネット上での徹底した顧客サービスだろう。ベゾスは、インターネット店舗は普通の店舗より顧客サービスが一段と重要である点を強調し、「顧客が一番に欲するサービスは、商品を見つける手助け」と指摘する。不完全な情報でも消費者が欲しい本を見つけられるような「サーチ(search)」機能を搭載し、また「パーソナライゼーション(personalization)」と呼ばれるツールを使って、各顧客が過去に買った本からお勧め書籍を推定し、ウェブサイトで知らせるといった、手の込んだ個別サービスも提供している。こうした機能は、バックリスト(新刊書以外の書籍)や、発行部数の少ない新刊書が顧客の目に留まるきっかけとなり、「アマゾン」を代表するインターネット書店の成長を、特に中小、専門書出版社は一概に歓迎しているようだ。

書籍市場に占めるネット販売はまだ数パーセント程度だが、「アマゾン」の急成長ぶりを最大手チェーンB&Nは黙視しなかった。一九九七年五月半ば、「バインズ&ノープル・ドット・コム」としてネット上に書店をオープンすると同時に、当時「アマゾン」が「地球最大の書店」と自称していたこ

とが事実反しているとして、同ネット書店を相手に訴訟も起こした。また提携、買収によって対「アマゾン」網を構築する戦略も採った。昨年一〇月、ドイツの複合メディア大手で米大手出版社「ランダムハウス」を買収した「ベルテルスマン」と提携を結び、同社による「バーンズ&ノーブル・ドット・コム」への出資を決め、その一ヶ月後には、「アマゾン」が書籍注文の約六〇％を依存する最大手取次、「イングラム」の買収計画を発表したのである（同計画は今年六月反トラスト法（米国版独禁法）執行機関の反対にあり、断念）。一方インターネット販売に完全に出遅れたボーダーズは過去一年間で株価が四七％も下落、今年に入ってネット販売を本格化させたが、四月、最高経営責任者が急きよ辞任する事態まで起きた。

(三) 生き残りを探る独立系中小書店

しかし二大チェーンによる「スーパーストア」の急激な拡大、インターネット書店の急成長に大きな打撃を受けてきたのは、やはり独立系の中小書店だ。一九八〇年代、「クラウン・ブックス」の安売り戦略に対し、CD売り場やカフェを併設するなどして、同チェーンとの差別化をはかり生き残った独立系書店も、一九九〇年代の二大チェーン店の拡大に直面し、次々と廃業に追い込まれた。一九九一年以来、独立系書店全体の占めるマーケットシェアは四〇％低下したともいわれる。二大チェーン店の拡張にかるうじて生き残った独

立系書店も今度は、高所得者やインテリといったこれまでの主要な顧客層を、インターネット書店にさらわれている。

激しい競争に絶えずさらされる独立系書店は団結して生き残ろうと、新しい試みに次々と乗り出している。昨年三月には、三四〇〇書店が加盟する全米書店協会（以下ABA）が中心となって、直接二大チェーンを、反トラスト法違反で裁判に訴えた。また今年五月には、独立系書店のブランドイメージを広告や、インターネット上のサービスなどを通して全米に高めていくための、マーケティングキャンペーン「ブック・センス」を打ち上げたのである。

もちろん独立系書店の中でも、例えば前掲した「ポリティックス&プローズ」のように、開店以来、業界の変化に絶えず対応し、著者、出版業界、書店業界の間で高い評価を得、二桁の売上げ増加を記録している書店が孤軍奮闘している点を強調しておきたい。

菱川摩貴（ひしかわ まき）

一九六七年広島県生まれ。日本経済新聞社文化部記者（出版・文芸担当）を経て、現在米國ワシントンD.C.で執筆活動続ける。三年前からトールマン発行の月刊誌『書店経営』のコラム「アメリカ書店・出版現地レポート」を執筆、連載中。

九九年度委員会活動について

人文会は、五月二八日に年次総会を開催いたしました。最初に販売委員会、調査・研修委員会、図書館委員会、弘報委員会の四委員会から九八年度の活動報告がなされ、次いで九九年度の執行部三役の選出と各委員会のメンバー構成が決定されました。

九九年度の執行部三役は昨年度に引き続き、代表幹事に菊池明郎（筑摩書房）、書記に濱地正憲（誠信書房）、会計に福田晴行（みすず書房）が選出されました。

九八年度は、小会創立三〇周年という節目の年にあたったために、通常設けられている四つの委員会のほかに「三〇周年委員会」が設けられ、いくつかの記念事業を企画いたしました。以下、その概要を列記いたします。

九月二八日には網野善彦先生による「新しい日本史の読み方」と題する講演会を紀伊國屋ホールで開催。一〇月二日にはジュンク堂仙台店店长福島聡氏、煥平堂部長今泉正光氏、未來社社長西谷能英氏に代表幹事菊池明郎が加わり、鈴木龍太郎（春秋社営業部長Ⅱ当時）の司会で「人文書の現在と未来」というタイトルで座談会を開催（『人文会ニュース』八三号収録）。一〇月には、『人文書のすすめⅡ』を刊行すると共に、それに収録されている「基本図書一覽」四四一七点を電子データ化したCD-ROM『CD-ROM版人文書基本図書検索システム』を製作。

このほか、三〇周年を記念して「人文会三〇周年フェア」を各地の書店様の協力をいただき、連続的に開催いたしました。このフェアにご協力を下さいました書店様には改めて御礼申し上げます。

人文会も、出版界を取り巻く厳しい状況と変化に対応した着実な活動をおこなっていくことが肝要かと思えます。こうした状況を踏まえながら、四委員会の委員長に今年度の活動予定・抱負などを語ってもらいました。

販売企画委員会

委員長 内藤繁人（勤草書房）

青木書店・古川清氏の後を継いで人文会の販売企画委員長を務めることになりました。よろしくお願い申しあげます。

「人文科学書の普及・販売」を積極的に推進することを目的としているのが、当委員会の仕事と思っております。

書店の方々、取次店の皆様のご協力を頂いて、人文会三社の良書の普及に努めて参りたいと思います。

いま、人文書の販売に当たっては、厳しい状況であるようですが、人文書とは「人間形成のための基本図書」と考えますと、読書人口も多く、内容も教養書から学術書まで、また分野も広域なのも特徴かと存じます。

読者との出会いの場をより多く作ることによって、またスペースの効率的な活用によってこそ、厳しさも好転するものと思っております。

各所のフェアなど積極的に展開して参ります。販売に関する企画案、ご要望などお寄せ頂ければ幸いです。

新委員会のメンバーは次の通りです。

副委員長 田村謙二(有斐閣)

委員 重光義彦(創元社)

対比地邦男(社会思想社)

土屋知可夫(福村出版)

調査・研修委員会

委員長 原田敦雄(大月書店)

前年度に引き続き委員長原田、副委員長吉田信夫(東京大学出版会)、藤代俊久(平凡社)の三名が留任し、新委員として二名を迎え、五名の体制でのぞむことになりました。

新委員は版元宮業畑の第一人者鎌内宣行氏(春秋社)と歴史書懇話会にこの人ありといわれた佐藤貞男氏(青木書店)の二名です。

今年度の課題は三つです。

一つは、版元宮業は崩壊したとまでいわれるなか、どの様にすれば「崩壊」しないで先に光を見出せるかを、「古い奴」といわれようが「時代おくれの男」たちのやり方で、追求してみたいと思います。

二つめは、インターネットを利用したさまざまな専門書販売の方途を、書店・読者の共同の利益をめざして調査・研修してみたいと考えています。

三つめは、大学内の市場掘り起こしです。この点については、販売委員会や図書館委員会とも相談しつつ、学内の書店・生協書籍部との研修をすすめたいと考えています。

図書館委員会

委員長 島田孝久(晶文社)

昨年度の活動は、「図書館必備基本図書カタログ」による販売促進と、大学図書館へのスタンディングオーダー実施に加え、「次世代電子図書館システム」の研究開発事業への参画等が主なものでした。

特に三番目の問題は難題で、かなりの時間を費やす結果となりました。

デジタルコンテンツによる資料の保存が、今後の私共に課せられたテーマでもあるわけです。

そんなこんなで、いまだ充分な働きをしていないではないかとの評価により、もう一年当委員会の委員長を命ぜられました。

今年度は、「聞く」・「見る」・「調べる」・「稼ぐ」の四つのカテゴリーで活動方針を立てました。さっそくどこから、「〈飲む〉」が抜けてないかい？」などと雑音が入りましたが、無視して前進あるのみです。

今年度も昨年同様、強力メンバーに恵まれました。何とぞ当委員会の新メンバーをよろしくお願いいたします。

副委員長 後藤光行（日本評論社）

委員 正木 宏（雄山閣出版）

馬場正彦（吉川弘文館）

成田共助（法政大学出版局）

弘報委員会

委員長 吉田哲夫（未來社）

昨年一〇月に当時の委員長の鈴木龍太郎氏（春秋社）が社内の人事移動で編集部長に就任したために、任期中中で吉田が暫定的に委員長を引き継ぎました。こうした経緯もあり、今年度も引き続き弘報委員長をつとめるよう仰せつかりました。

弘報委員会は、専門書の普及・販売を積極的に推進すると共に人文会の活動を皆様にご理解いただくために活動してきました。その主要な手段として、『人文会ニュース』を刊行してきました。年三回の刊行ですが、出版界を取り巻く様々な問題や潮流を的確に捉える記事を取り上げるよう心がけています。また、書店様の実際の棚づくりの参考になるようなシリーズを企画しています。

その手始めは「一五分で読む〇〇」シリーズで、これは今年六月発行の『人文会ニュース』八四号からスタートしています。第一回目は、正木晃氏による「一五分で読む

教の歴史」でした。

国内外の出版事情に関しては次のシリーズを考えています。海外事情については「アマゾン」で象徴されるインターネット書店の登場などで大きく変貌しつつある「アメリカの出版事情」を、ワシントン在住の菱川真貴さんにレポートしていただきます。国内では、書店の経営者の考え方、あるいは棚担当者の品揃えに関する考え方や活動などをインタビューする「書店探訪（仮）」の記事です。

昨今の厳しい出版状況の中で、読者への効率的な専門書の紹介は大きな課題となっています。二三社の人文会会員社でも半数以上がホームページを開設しています。人文会としてもインターネットやホームページを活用する時期になっているといえます。その利用方法や問題点、さらにこわした手段を活用した弘報活動のあり方についても研究を深め、できれば早めにスタートしたいと考えています。

弘報委員会では『CD-ROM版人文書基本図書検索システム』の書目改訂を継続的におこなうことになりました。これららの作業もインターネットやホームページを上手に利用することで、より一層タイムリーな情報を皆様にお届けできるのではないかと考えております。

委員会のメンバーは次の通りです。

副委員長 杉田啓三（ミネルヴァ書房）

委員 平石 修（御茶の水書房）

段塚省吾（紀伊国屋書店）

浴野英生（草思社）

人文会会員名簿

(〒111-8755 台東区蔵前 2-5-3 筑摩書房内)

1999. 9. 現在

	社名	担当者	〒	所在地	電話	FAX
幹事	青木書店	佐藤 貞男	175-0092	板橋区下赤塚 8-12-12	5997-4051	5967-7691
幹事	大月書店	原田 敦雄	113-0033	文京区本郷 2-11-9	3813-4651	3813-4656
	御茶の水書房	平石 修	113-0033	文京区本郷 5-30-20	5684-0751	5684-0753
	紀伊國屋書店	段塚 省吾	156-8691	世田谷区桜丘 5-38-1	3439-0128	3439-3955
	勁草書房	内藤 繁人	112-0004	文京区後楽 2-23-15	3814-6861	3814-6854
	社会思想社	对比地邦男	113-0033	文京区本郷 3-25-13		
				中銀本郷3丁目ビル	3813-8101	3813-9061
	春秋社	鎌内 宣行	101-0021	千代田区外神田 2-18-6	3255-9611	3253-1384
幹事	晶文社	島田 孝久	101-0021	千代田区外神田 2-1-12	3255-4501	3255-4506
幹事	誠信書房	濱地 正憲	112-0012	文京区大塚 3-20-6	3946-5666	3945-8880
	創元社	重光 義彦	162-0801	新宿区山吹町334-11	3269-1051	5229-7139
	草思社	浴野 英生	150-0001	渋谷区神宮前 4-26-26	3470-6565	3470-2640
代表幹事	筑摩書房	菊池 明郎	111-8755	台東区蔵前 2-5-3	5687-2680	5687-2685
	東京大学出版会	吉田 信夫	113-8654	文京区本郷 7-3-1		
				東京大学構内	3811-8814	3812-6958
	日本評論社	後藤 光行	170-8474	豊島区南大塚 3-12-4	3987-8621	3987-8590
	福村出版	土屋知可夫	113-0033	文京区本郷 2-30-7	3813-3981	3818-2786
	平凡社	藤代 俊久	152-8601	目黒区碑文谷 5-16-19	5721-1234	5721-1239
	法政大学出版局	成田 共助	102-0073	千代田区九段北 3-2-7		
				法政大学一口坂別館内	5214-5540	5214-5542
幹事	みすず書房	福田 晴行	113-0033	文京区本郷 5-32-21	3814-0131	3818-6435
	ミネルヴァ書房	杉田 啓三	607-8494	京都市山科区日ノ岡堤谷町1		
				(075) 581-5191 (075) 581-8379		
			101-0054	千代田区神田錦町 3-6		
				石澤ビル3F	3296-1615	3296-1620
幹事	未來社	吉田 哲夫	112-0002	文京区小石川 3-7-2	3814-5521	3814-8600
	雄山閣出版	正木 宏	102-0071	千代田区富士見 2-6-9	3262-3231	3262-6938
	有斐閣	田村 謙二	101-0051	千代田区神田神保町 2-17	3265-6811	3262-8035
	吉川弘文館	馬場 正彦	113-0033	文京区本郷 7-2-8	3813-9151	3812-3544

販売企画委員会 ◎内藤 ○田村 重光 对比地 土屋

調査・研修委員会 ◎原田 ○吉田(信) 藤代 鎌内 佐藤

図書館委員会 ◎島田 ○後藤 正木 馬場 成田

弘報委員会 ◎吉田(哲) ○杉田 平石 段塚 浴野

20世紀社会科学のフロンティア

<社会学>の新しい古典

シリーズ 社会学の思想

(第2回配本)

マニュエル・カステル/大澤善信[訳・解説]

都市・情報・ グローバル経済

ポスト・モダニズム的言説の牢獄から脱却し、情報主義とグローバル化の自己像を展開する著者自選集。 ●¥5600

(第1回配本)

アンソニー・ギデンズ/藤田弘夫[監訳]

社会学理論と現代社会学

構造の二重化の視点で社会学理論の統合をはかるギデンズが12のテーマを組上に斬新な視点で展開する思考のプロセス。 ●¥5800

青木書店

東京都千代田区神田神保町1-60 税別
TEL [03] 3219-2341 FAX [03] 3219-2585

変貌する先住民社会と学校教育

新保満 / カナダ北西準州デネーの事例
学校教育との接点と代替はインディアン社会の文化的側面に引き返すことの出来ないような深刻な変容を引き起こす。

近代イギリス自由労働主義の研究
鈴木光重著
A5判・二四〇頁・三〇〇〇円
チャーターティスト運動の衰退のあとをうけた一八六〇年代の新しい労働者の政治運動の傾向と自由労働主義の詳細な分析。

アジアにおける地域協力と日本
涂照彦編著
A5判・三六〇頁・三八〇〇円

加盟各国の視点からASEAN観を抽出するとともに「運業経済圏」・「華南地域圏」等局所的な構想圏にXを入れた経済分析。

御茶の水書房 価格は税別

東京都文京区本郷5-30-20 TEL03-5684-0751

ゴールド・マウンテン

ある中国系移民家族の百年

リサ・シー/住友進訳 激動のアメリカ社会をたくましく生きる中国系移民の姿を描く、ノンフィクション巨編◆3800円

クレオール事始

西成彦 豊穠な物語り世界として世界の注目を集めるクレオールの魅力をいきいきと紹介する。クレオール入門◆1800円

老いのレッスン

オリヴェンシュタイン/鳥取絹子訳 自分の老いに気づいた時から始める7つのレッスンを実践的に提案する。◆1800円

文明のなかの博物学

西欧と日本 <上・下>

西村三郎 東西で独立して発展した博物学・博物趣味の源流を遡り、壮大なスケールで展開する比較文明論。◆各3200円

紀伊國屋書店

出版部：東京都世田谷区桜丘5-38-1
TEL03(3439)0128(営業) 表示価格は税別

時計が変えた人間の歴史と文化

時間の歴史

近代の時間秩序の誕生

ロツスム著/藤田幸一郎他訳

時計の発明と時間の計測は、人間社会の歴史に深い影響をおよぼす技術革新だった。機械時計の発明の歩みと、それがヨーロッパの中世社会に次第に広がっていき、今日までの時間秩序がつくられていく様子を生きいきと描きだす

A5判上製
8000円
(税別)

大月書店 東京都文京区本郷2-11-8
電話03(3813)4651(代表)

表現としての 身体

メルロ＝ポンティ
哲学研究

■末次弘 デカルト、サルトルの哲学と
対比しながら、メルロ＝ポンティ哲学の
全体像に全力で迫る稀有の書。 4300円

◇**ドライ・ラマ14世の本**——

現代を正しく生き抜く智慧と、悟りへ向
けての(心の鍛錬法)を説いた名法話集。

ドライ・ラマ <近刊> 死を見つめる心

■ハーディング祥子訳 (予)2500円

ドライ・ラマ 他者と共に生きる

■田崎國彦・邊辺都子訳 2900円

春秋社 東京都千代田区外神田2-18-6
☎(03)3255-9611<価格は税別>

勁草書房

人間環境学シリーズ

竹市明弘・植田和弘・片山幸士編

[1] 人間環境の創造

持続可能な文明のために

竹市明弘・渡辺雄三・早川 勇編

[2] 心とコミュニケーション

精神環境の探求

竹市明弘・小橋澄治・笠谷和比古編

[3] 日本文化の21世紀

歴史・文化環境を生きる

全3巻 各2400円

東京都文京区後楽2-23-15* 価格税別
Tel 03-3814-6861/Fax 03-3814-6854
http://www.keisoshobo.co.jp

癒える力

竹内敏晴 出会う。聴く。触れあう。歌
う。安らぐ。——からだの語ることばに
耳を澄まし、新しい自分と出会う。長
年にわたる思索のすべてを注いで、今
人間関係に苦しむ人に贈る本。 1575円

老親介護 こんなときどうする?

川島淳子・敷田牧子 介護の現場を徹
底取材。あらゆる場面での悩みをケ
ース別にあげ、具体的な解決法を探る。
専門家や経験者の貴重なヒント満載。
後悔しないための介護術。 1995円

晶文社

東京都千代田区外神田2-1-12
電話03(3255)4501 価格は税込

人、それぞれの本懐
青山淳平著 私財三千億を投げうった再建王坪内寿夫、漂
泊の俳人種田山頭火、来たるべき時代を追究した学者渡植
彦太郎など六人の凛とした生き方を描き出す★一六〇〇円
儲けんと思わば天に貸せ
森村市左衛門著 TOTOなど異彩を放つ大企業群の創始
者・森村市左衛門の実践哲学と経営理念とは?★二〇〇〇円
魯迅に学ぶ批判と抵抗
佐高信著 独立独歩の思想―魯迅の文学は生き方を人に
問う。著者の「反骨哲学」の源泉を辿る。教養文庫・六〇〇円

社会思想社 東京都文京区本郷3-25
電話03-3813-8101(税別)

人間性の最高表現(上)(下)

その輝きを実現した人びと ■P・フェルツ著
芸術、科学、宗教など様々な分野で自己実現を成し遂げた
人たちが人生の輝きを実現する七つの道を学ぶ。
平松園枝・手塚郁恵訳

●2400円 ●2200円

学校現場で使える

■諸富祥彦著

カウンセリング・テクニック(上)(下)

(上)育てるカウンセリング編・十一の法則 ●2000円
(下)問題解決編・十の法則 ●2200円
学校崩壊・いじめ・不登校対策などすぐに役立つ技法。

誠信書房

東京都文京区大塚3-20-6
☎03-3946-5666 ▶税別

731 免責の系譜

■第一級の新資料(新妻ファイル)でいま解き明かされる
七三一部隊の正体とGHQ vs 首謀者との闘いのドラマ!

細菌戦部隊と秘蔵のファイル

太田昌克／著 (絶賛発売中!) 四六判 1800円

死期近かった元陸軍参謀から若き記者に託された「秘蔵ファイル」、それは、GHQによる秘密尋問の速記録を含む第一級の◎資料。推理・推論でしか迫れなかつた現代史の闇の一角が、遂に白日の下に曝される!!



日本評論社

受注センター ☎0492-74-1780 (価格は税別)

佐藤郁哉

現代演劇の

フイールドワーク

芸術生産の文化社会学

「芸術はビジネスになりうるか?」(ハバトロン付きの芸術家に真に自由な表現は可能か?)「演劇がつくられるさまざまな「現場」における丹念なフイールドワークを通して、近代芸術成立の難問に挑んだ野心作。斬新な視点と手法で文化社会学の新境地を切り開く。」

A5判/五二〇〇円

東京大学出版会

東京都文京区本郷7-3-1 ☎03-3811-8814
http://www.utp.or.jp/ <表示は本体価格>

性格研究の技法

シリーズ・心理学の技法

◆最新刊◆
杉山憲司・堀毛一也編著 認知主義、相互作用論、生理学など様々なアプローチからの性格観と研究例を紹介。とくに最近注目されている定性的研究についてもページをさき、また、心理臨床の実践にも応用できるよう考慮した。 A5判・定価三〇四五円

認知研究の技法

◆好評既刊◆
海保博之・加藤 隆編著

シリーズ・心理学の技法
A5判・定価二五二〇円

性格心理学ハンドブック

◆好評既刊◆
詫摩武俊監修

青木孝悦他編集企画 A5判・定価一八九〇〇円

福村出版

東京・文京 本郷2-30-7 電話(03) 3813-3981
定価は5%税込 http://www.fukumura.co.jp/

伴 侶 高群逸枝を愛した男

栗原葉子 女性史研究に巨石を投じた高群逸枝の夫として、その生涯を賭けた男、橋本憲三の生き方と思想に迫った渾身の評伝。上野千鶴子氏も絶讃。●2,000円(税別)

熱い海 春廬家お花一代

工藤美代子 きつぷ良し、器量良し、芸達者で頭もきれる。東京の奥座敷を舞台に、激動の時代を生き抜いた、熱海きつぷの名芸妓の色香あふれる一代記。●1,300円(税別)

「太平記読み」の時代 近世政治思想史の構想

若尾政希 江戸の政治思想の基軸は、朱子学などではない。「太平記読み」の思想こそが江戸の秩序の根幹である。この驚くべき主張を実証する鋭敏の論考。●2,800円(税別)

いろいろずきん

中井久夫 文・絵 (自分以外の人にも心がある!) 精神科医がわれらに贈る5人のずきんちゃんの心の成長の物語。一巻50円

少年時代

クッツェー その子は十三歳。引き裂かれた感情に入り込み蘇らせたファン待望の自伝的物語。くぼたのぞみ訳 3500円

現代小説38の謎

ザザ・ランド「燈台へ」からウエルシュ、ピンチョンまで。小説好きのための謎解きシリーズ第三弾。川口喬訳 3500円

エランベルジエ著作集 2 精神医療とその周辺

中井久夫編訳 ジャネとシャルコ再発見、魔女狩りのマニエール批判、「動物園と精神病院」など絶品の13篇。2000円

みすず書房 (税別)

東京文京本郷 5-32-21 <http://www.mszej.com>

平凡社

〒152-8601 東京都目黒区碑文谷5-16-19
電話00180-0-29639 / 003-5721-1234

ミネルヴァ書房

三角縁神獣鏡

藤田友治

●その謎を解明する 多くの謎に満ちた鏡の謎を研究史を克明に辿り解明する。 二八〇〇円

福井謙一博士の死

川端眞一著 ●大学回り記者哀歌記 現役記者が報道業界の論理と実態を問い直す。 二二〇〇円

科学は「自然」をどう語ってきたか

菅野礼司著 ●物理学の論理と自然観 思想としての科学の復権を主張する。 二五〇〇円

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL 075-581-0296 FAX 075-581-0589 (税別)

法政大学出版局

B・M・ソークス / 藤森和子 両手いっぱい の 時間

不治の病におかされた子どもたちの心の記録
絵画などの創作活動や動物のぬいぐるみ
を独創的に使った自己表現活動を通して、
不治の病におかされた子どもたちの心の
内面に迫る。(病気とともに生きる)子ども
もたちの勇気を描きつつ、サイコセラピ
ストやライフ・スペシャリストの役割を
明らかにした感動の記録! 二三〇〇円

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-7
☎03-5214-5540 / 振替00160-6-95814